

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ京都9のための書き下ろし

極寒の檻

作・庵字

夜の静寂^{しじま}を破る打撃音が幾度か鳴り響いた直後、水音が続いた。男が池の表面に張った厚い氷をついに打ち砕いたのだ。持っていた石を投げ捨てた男は、文字どおり氷のような冷たさの池の水に手を入れ、水中からビニール袋を引き上げた。

「行きましょう」

少年探偵、乱場秀輔^{らんばしゅうすけ}の声を合図に、彼と、福島県警捜査一課^{くろまつ}の暮松刑事が、身を潜めていた木陰から飛び出し、二人に遅れまいと、私——石上誠司^{いしがみせいじ}も続いた。私たちに気づいたのだろう。男の手が——ビニール袋の中身を確認していた手が——ぴたりと止まる。握られているのは、何本もの札束だった。

「その金は」と懐中電灯を男に向けて、暮松刑事は、「辰見^{たつみ}さんから奪ったものだな。つまり、辰見さんを殺害したのも、お前だったというわけだ」

「な……なにを言ってるんですか、刑事さん」手袋をした手で札束を握りしめたまま、男——蛇島^{へびま}は、「これは……俺の金ですよ。わけあって、ここに隠しておいただけです。それとも……何ですか、この金が辰見さんのものだという証拠があるとしてもいんですか」

往生際が悪いな。私は心中で嘆息する。確かに、殺された辰見が所持していたはずの現金は、銀行から下ろしたての新札ばかりと見られているので、被害者の指紋が付着している可能性は少ない。蛇島は、さらに続けて、

「それに、辰見さんが殺されたのは、昨日の朝でしょ。であれば、この金が辰見さんのものでないことは明らかじゃないですか。この池の水が凍ったのは、一昨日の深夜、つまり、辰見さんが殺される前で、それからずっと溶けずに氷が張ったままです。どうしたら、凍った池の中に奪った金を隠せるっていうんです？」

あくまで抵抗するつもりなのか。蛇島は刑事に、挑むような目を向ける。が、私にとっては、むしろ願ってもない展開となった。犯人が素直に罪を認めなければ、我が名探偵、乱場秀輔の出番となる。彼の推理を拝聴できる。

あとは任せた、とばかりに、暮松刑事に視線で促され、その乱場が前へ出た。女の子だ、と言われれば、十人中十人が信じてしまう、眉目秀麗の少年探偵。

その彼の、普段はあどけない童顔が変化した。一種異様な迫力を滲ませた、彼が推理を披露するときだけに見せる、蠱惑的な表情へと。

「まず……」と乱場は、受けて立つ、というように蛇島の目を見返して、「あと質問から答えましょう。確かに気温の推移からして、この池が凍結したのは、蛇島さんも言われたように一昨日の深夜のことでしょう。対して、辰見さんの死亡推定時刻が昨日の午前六時から七時のあいだであることも揺るぎません」

「だったら——」

「単純な話です」蛇島の声を制して、乱場は、「この事件を『強盗殺人』だと考えたから話がややこしくなったんです。辰見さんが殺されたのは昨日の朝ですが、現金自体は一日の夜までに盗み出されていたというだけです。つまり、蛇島さん、あなたの行動を時系列にすると、こういうことになります。一昨日の、恐らく夕方頃に辰見さんの部屋へ忍び込んで現金を盗み出し、まだ水が凍り付く前にビニール袋に入れて池の底に隠す。そして、翌朝になって辰見さんを殺害。旅館の従業員が部屋で死体を発見したというわけです。」

これも推測ですが、辰見さんは現金を盗まれたことにすぐには気付かず、それを知ったのは翌朝になってからだったのでしょう。そこで辰見さんは、蛇島さんに真っ先に疑いを向けた。当然、あなたは容疑を否認して、身体検査でも部屋の家捜しでも、何でもしてくれ、と豪語したことでしょう。盗み出した現金を旅館の庭の池なんていう特異な場所に隠したのは、そのためでしょうからね。

しかし、そんな茶番に辰見さんは付き合わなかった。お二人のあいだで、どんなやり取りがされたのかは分かりませんが、結果から見ておおよその想像はつきます。蛇島さん、あなたは口論の末、辰見さんを殺害してしまうこととなった。

部屋の床の間に置かれていた鋼鉄製の置き時計でもって、頭蓋骨を砕いて」

いまだ札束を握ったままの、蛇島の顔が震えた。首肯するはずもないので、単に寒さによるものだったのだろう。乱場の推理は続く。

「辰見さんを殺してしまったのは想定外のことでしたが、あなたは、これを利用しようと思った。外部から何者かが侵入したように見せかけて、現金強奪の罪も、その存在しない強盗犯に被せてしまおうと考えた。ですが……」

いちど言葉を止めてから、乱場は、

「辰見さんの部屋は一階で、庭に面していたから、外部犯が侵入する条件は整っていたといえました。この旅館には、正面玄関をはじめとした出入口にはすべて防犯カメラが設置してありますから、外部犯が侵入したことにするなら、経路として使えるのは、庭に面した窓しかない。室内を荒らし、前日に奪った大金からしたら雀の涙ほどとはいえ、強盗の仕業に見せかけるため、辰見さんの財布からも現金を抜き取ったあなたは、架空の強盗の侵入脱出経路に見せかけるために開け放った窓から庭に出て、最後の仕事に取りかかるうとします、そうです、庭の池に沈めてあるお金の回収です。そのあとは、辰見さんの死体が従業員に発見される前に、さっさとチェックアウトしてしまっただけがいい。辰見さんとあなたとの繋がりはすぐには知られることがない程度に薄いので、自分のもとに警察が来るとしても時間に猶予はあるはず。そのあいだに、海外へ高飛びする準備を、とも思っていたのですか？」

しかし……池に辿り着いたあなたは、痛恨の失敗をしてしまったことに気付きました。前日夜半から未明にかけての急激な気温の低下によって、池の水が凍りついてしまっていたのです。蛇島さん、あなたの出身は九州だそうですから、東北の、ここ福島県の冬の寒さがどれほどのものか、この程度の池の水など簡単に凍結させてしまえるほどのものだというのを、知らなかったのですね」

そのときのことを思い出したのだろうか、もう乱場と目を合わせていない蛇島は、苦渋に顔を歪め、こんなに寒い夜だというのに、額に玉のような汗を浮かべていた。乱場が話を再開する。

「氷を割ってしまったければ、お金を回収できない。氷を割る道具自体には事欠きません。手頃な石が庭にいくらでも転がっていますからね。いま、あなたがやったように。ですが、その場で実行するのは躊躇^{ためら}われた。氷を打ち割る作業を行えば、当然ですが結構な打音が響いてしまいます。一発で割れる保証もない。それくらいは想像できます。その音を聞きつけて、誰か——すでに朝食の用意をしているであろう旅館の従業員——が飛んでくるかも知れない。そんな危険は冒せなかった。やむなく、その場でのお金の回収を断念したあなたは、大人しく自分の部屋へ戻ることを余儀なくされたわけです。それからすぐのことでした、部屋に朝食を運んできた従業員によって、辰見さんの死体が発見されたのは」

「……どうして、金がここにあると分かった？」

蛇島から再び視線を向けられると、乱場は、

「いくつか得られた手がかりを組み合わせてみた結果です。まず、あなたが連絡先を教えたら予定どおりチェックアウトしていい」と警察から言われたにもかかわらず、延泊したということ。前日には、仕事の都合で翌朝早くに帰る、と他の宿泊客や従業員に喋っていたようなのに。警察か、もしくは他の誰かが、池からお金を発見してしまわないか監視するためですね。さらに、事件が発覚した朝から、しきりに天気を、特に気温を気にしていたそうですね。気温が上昇して池の水が溶けないかと願って。実際に、この寒期中、あなたが何度も外に出ては庭を眺めていたという目撃証言もあります。池の氷の状態を見るためですね。しかし、天候は最後まであなたに味方しませんでした。上空に厚く垂れ込めた雲は日光を遮り続け、昼になってもいっこうに気温は上昇しなかった。まだ館内に警察官がいる中、強行突破で池の氷を割ることも出来るわけがありませんからね。

これらの手がかりを踏まえて、あなた——そして凍った池が怪しいと思った僕は、罠を仕掛けてみることにしたんです。暮松さんにお願ひして、いったん警察に撒収する振りをしてもらいました。警察の目がなくなったら、あなたはすぐに強行突破に打って出るだろうと思ったからです」

完全に観念し、がくりと肩を落とした蛇島は、暮松刑事に連行されていた。

「石上先輩、寒い中つきあってくれて、ありがとうございます」

こちらを向いた乱場の顔からは、もう、推理を披露していたときに見せていた蠱惑的な表情は消えていた。真っ直ぐな前髪の下で、女の子と見まごう童顔を微笑ませる彼に、私もまた笑顔を返した。

(了)

お読みいただきありがとうございます。「うー45、46」「新生ミステリ研究会」にて、この短編に登場した、少年探偵、乱場秀輔と、そのワトソン石上誠司が活躍する長編ミステリ『妖精館殺人事件』を販売しております(1,200円)。

隣接の姉妹店「うー47」「名探偵、皆を集めてさて」と言い

とともに、他にも多数のミステリ作品を取り揃えております。
お立ち寄りいただければ幸いです。

新生ミステリ
研究会
ホームページ



